

平瀬マンカイ祭祀場の奄美大島秋名海岸の地形・地質学的特徴

鈴木 明彦¹・圓谷 昂史²

Geomorphological and geological features of Akina beach, the enshrining site of the Hirasemankai festival, Amami-Oshima Island, Kagoshima Prefecture, southwest Japan

Akihiko SUZUKI¹ and Takafumi ENYA²

はじめに

岩石に神が依りつくという神概念は、一般的に磐座いわくらとよばれる。岩石信仰は、縄文時代にさかのぼる自然崇拝が基層の信仰である。また、磐座（あるいは岩座）は、神、神の憑依、祭祀施設にかかわる石、岩、洞窟などを一括した広義の概念である（野本 2006）。つまり、岩石信仰と呼ばれるものを広義の磐座と表現すれば、石そのものを神として信仰するものを「石神」、石や岩に神が依りつく信仰を「磐座」（狭義）、石で区切られた空間に神が降臨する信仰を「磐境いわさか」と定義できる（池田 2018）。

奄美群島は鹿児島県に属するが、1609年薩摩侵攻以前は琉球王府が支配していたため、基層文化は琉球文化の影響を強く受けていた。現在の奄美文化の大きな特徴は、その地理的位置から、琉球文化と大和文化の二つの異なる文化が混在・変容している点にある。そのため、沖縄本島では見られない奄美独特の祭祀も存在する（下野 2005；松井・高橋 2011）。

旧暦8月上旬から15日にかけて、奄美大島の各集落で行われているアラセツ行事は、今年の稲作の豊年を祝い、来年の豊作を願う豊年祭行事である。中でも龍郷町の秋名集落で行われているアラセツ行事は、山と海から稲霊いなだまを招いて五穀豊穰に感謝し、来年の豊作を祈願する祭りとして、国の重要無形民俗文化財に指定されている（龍郷町 2019）。秋名のアラセツ行事は、水田や畑山の神々への豊作祈願であるショチョガマと、海の彼方の「ネリヤ」の神への祈願である平瀬マンカイに分けられる（下野 2005）。

このうち平瀬マンカイは、秋名海岸に露出する岩

礁で行われる特異な祭事である。奄美の常世ネリヤカナヤから神を招く行事として、民俗学的にも注目されている（下野 2005, 2013）。今回、地形や地質の特徴に基づいて、神事の場として重要な秋名海岸の意義を検討した。併せて2019年9月6日に行われた平瀬マンカイについて、その概要を報告する。

調査地域・方法

筆者は、2019年1月28日～30日及び同年9月5日～7日に、奄美大島龍郷町秋名周辺の地形・地質調査を行った（第1図）。野外調査では秋名海岸に露出する岩礁（＝平瀬）の野外観察に、特に重点をおいた。また、同時に秋名海岸に打ち上げられていた漂着物の調査も行った。さらに、龍郷町のアラセツ行事に関する民俗学的な文献調査を試みて、これに関わる島内の伝説・伝承（下野 2005, 2013）を検討した。

地形・地質概説

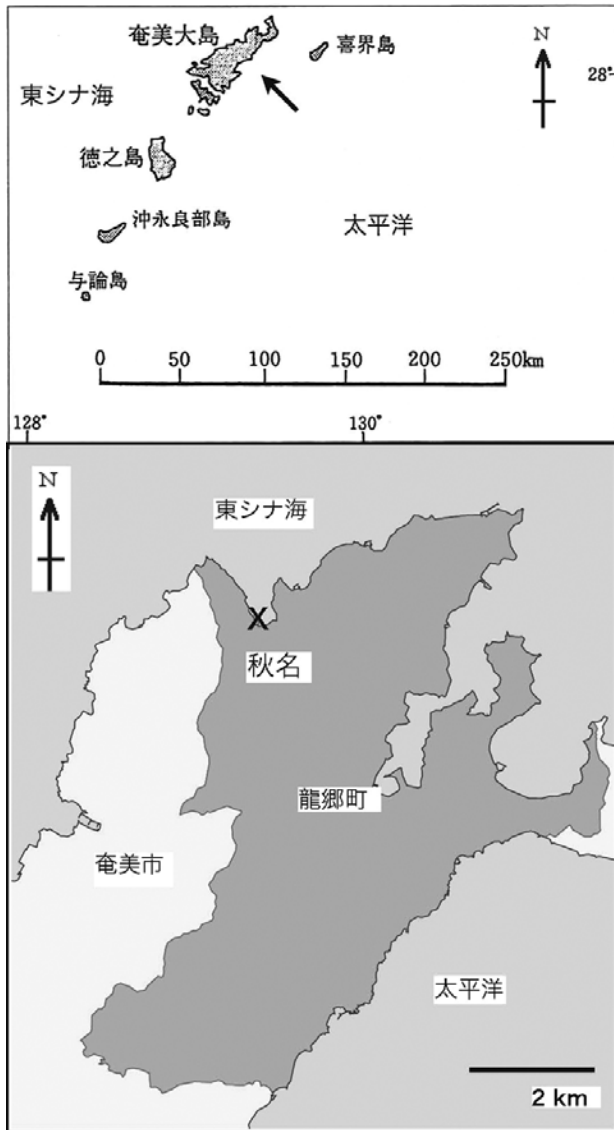
奄美大島は、奄美群島最大の島で、鹿児島県の南西部に位置する（第1図）。外周約461km、面積約712km²の島で、最高点は標高694mの湯湾岳である（鹿児島県 1968）。本島の中部～南部は、一般に山地が海岸線までせまり、周囲は切り立った海食崖である。一方、北部の笠利半島では山地が低く段丘地形が発達し、海岸はなだらかである。奄美大島は黒潮の通過する地点で、黒潮本流が島の西側をおよそ100km付近で北東に向かって進んでいる。

¹ 〒002-8502 札幌市北区あいの里5-3-1 北海道教育大学札幌校地学研究室

¹ Department of Earth Science, Sapporo Campus, Hokkaido University of Education, 5-3-1 Ainosato, Kita-ku, Sapporo 002-8502, Japan

² 〒004-0006 札幌市厚別区厚別町小野幌53-2 北海道博物館

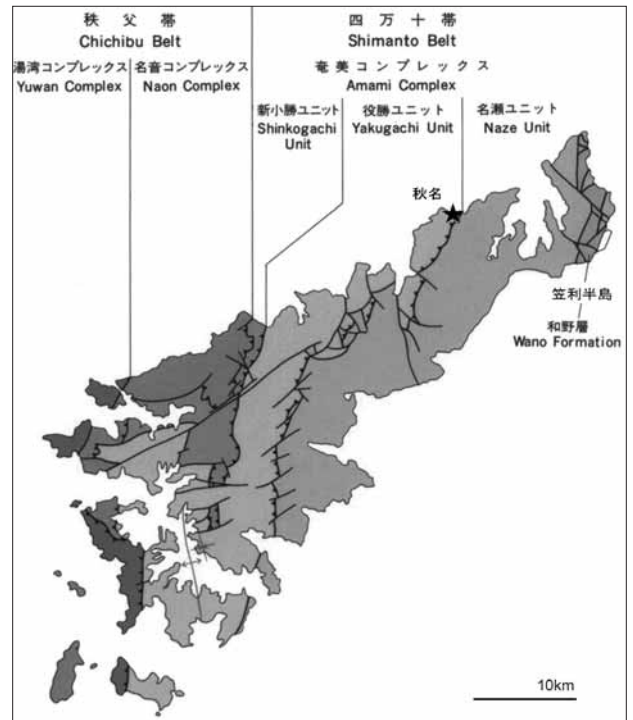
² Hokkaido Museum, 53-2 Konopporo, Atsubetsu-cho, Atsubetsu-ku, Sapporo 004-0006, Japan



第1図 奄美大島龍郷町秋名海岸の位置 (X印)。

奄美大島には、ジュラ紀-白亜紀前期の堆積岩コンプレックス (秩父帯) と白亜紀-新生代の堆積岩コンプレックス (四万十帯) が分布し、堆積岩コンプレックスの地表での露出は少ないが、基本的には西南日本の地質帯の延長部分であると考えられる (竹内 1993, 1994; 第2図)。主に堆積岩からなり、複雑な地質構造や混在相が発達する、5万分の1縮尺の地図に表現できる規模の地質体を、堆積岩コンプレックス (sedimentary complex) と呼ぶ (竹内 1994)。

奄美大島の地質構造発達史は、以下の通りである。
 (1) ジュラ紀後期-白亜紀前期：石炭紀から前期白亜紀に噴出あるいは堆積した玄武岩・石灰岩・チャート及び珪質泥岩等の海洋性物質とジュラ紀後期から白亜紀前期に堆積した砂岩及び泥岩の陸源物質が順



第2図 奄美大島の地質区分図 (竹内 1994を改変)。
 ★：秋名海岸。

次付加し、湯湾コンプレックスと名音コンプレックスが形成された。(2) 白亜紀後期：砂岩・泥岩・酸性凝灰岩及び玄武岩等からなる奄美コンプレックスが形成された。この時構造的上位の部分は (新小勝ユニット)、より古い堆積岩コンプレックス (おそらく秩父帯の湯湾コンプレックスや名音コンプレックス) から岩塊が構造的に取り込まれた。(3) 古第三紀始新世：名瀬ユニット上に前弧海盆堆積物として和野層が堆積し、堆積岩コンプレックス中に火成岩類の貫入があった。(4) 第四紀更新世以後：何度かの隆起により、高・中及び低位段丘面の形成及び堆積物の堆積が起こった (竹内 1994)。

秋名海岸の地形・地質環境

地形学的特徴をみると、秋名海岸は東側に面した海食崖をもつ岩礁海岸である。武運崎と鏡崎に挟まれた小湾が、秋名湾である。湾奥には東西方向の砂礫浜が存在するが、両側は海食崖となり、南北方向にはわずかに砂礫浜が存在する (第3図A)。

秋名海岸には、岩礁海岸に特徴的な海成侵食地形が認められる。海岸には無数の岩礁が点在するが、このうち陸側に平瀬とよばれる岩礁がある。平坦な侵食面を形成し、残存した岩礁がカミ平瀬、メラベ平瀬およびインガ平瀬である (第3図B)。



第3図 秋名海岸。A. 秋名部落西から秋名湾を望む。写真中央は武運崎。B. 秋名海岸の平瀬（右：カミ平瀬，中：メラベ平瀬，左：インガ平瀬）



第4図 平瀬を構成する岩石。A. カミ平瀬（剥離が著しい黒色粘板岩）。B. メラベ平瀬（砂岩泥岩互層）。

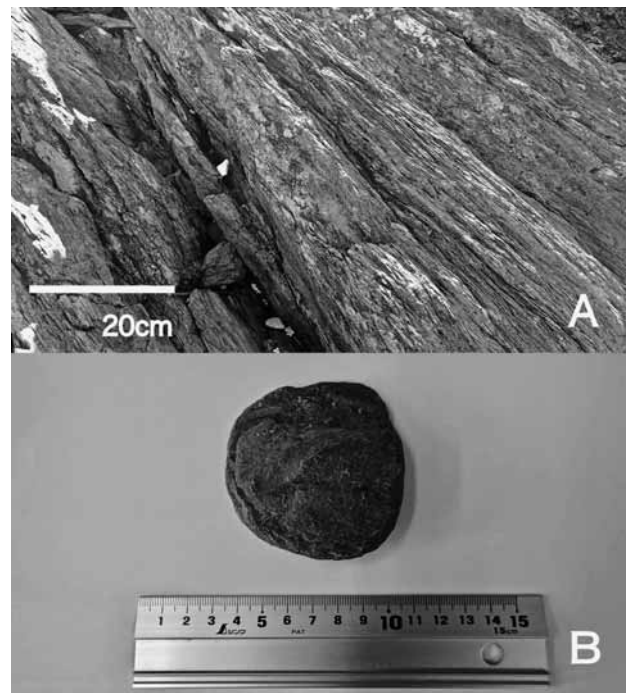
奄美大島北部は、主に中生代白亜紀の堆積岩コンプレックスから構成される（竹内 1994）。秋名周辺は、四万十帯奄美コンプレックス役勝ユニットに所属し、剥離の発達する粘板岩類が優勢である（竹内 1994）。秋名海岸では、黒色粘板岩が卓越し、赤色泥岩や緑色泥岩を伴っている。海岸に露出した岩礁がカミ平瀬、メラベ平瀬およびインガ平瀬である。

観察を行った平瀬の代表的な露頭写真を示す。カミ平瀬は黒色粘板岩からなり、剥離が著しい（第4図A）。メラベ平瀬は砂岩泥岩互層からなり、特に緑灰色泥岩部は剥離が発達する（第4図B）。一方、インガ平瀬は黒色粘板岩からなり、剥離が著しい（第5図A）。いずれの平瀬にも剥離が顕著に見られ、平坦面を形成した。なお、海岸に見られる海浜礫では、黒色粘板岩が卓越していた（第5図B）。

秋名海岸の平瀬マンカイ

ここでは秋名のアラセツ行事のうち、平瀬マンカイを紹介する（下野 2005；龍郷町 2019）。

早朝の山側でのショチョガマが終了すると、しばしの休憩を経て、祭りの舞台は海側へと移動する。いよいよ秋名の海岸で行われる平瀬マンカイである。海辺の舞台は、海岸に露出したいくつかの岩礁である。神事が主に行われるのは、海側の畳1枚半ほど



第5図 平瀬を構成する岩石。A. インガ平瀬（剥離が著しい黒色粘板岩）。B. 黒色粘板岩の転石。

のカミ（神）平瀬，陸側の畳3枚ほどのメラベ（女）平瀬である（第6図）。さらにメラベ平瀬の後方にも、巨岩のインガ（男）平瀬がある。まず祭りの前に女の子はカミ平瀬，男の子はインガ平瀬を踏ませるという習慣がある。祭りにあたって、カミ平瀬にはナバ石（サンゴ）にはさんだカシキやミキが供え



第6図 秋名海岸で行われた平瀬マンカイ (2019年9月6日)。
右: カミ平瀬 (女5人のノロ)。B. メラベ平瀬 (男3人女4人の神人)。

られる。これは海の彼方のネリヤへの供物となる。カミ平瀬には、5人のノロ(神女)が立ち、東を向いて稲魂を招く。一方、メラベ平瀬には男3人女4人計7人の神人が立ち、カミ平瀬に呼応して祭りを進めてゆく。

マンカイの進行は、カミ平瀬の5人のノロが、メラベ平瀬の神人の太鼓に合わせて、「玉ぬ石登で、何うぬ祝い取りゅり、西東ぬ稲魂がなし、招き寄すいる」と歌い出す。歌に合わせて、メラベ平瀬の神人はマンカイの舞いをする。神歌が終わると、今度はメラベ平瀬が歌い、カミ平瀬のノロが舞う。マンカイの舞いは、岩の上に立ったまま、手だけを動かすもので、「押す、こねる、拝む」という動作の繰り返しであるという。このマンカイの一連の動作は、神の力を招く宗教的表現でもある。その神とは、海の彼方のネリヤの神である。しかし、カミ平瀬のノロたちは、初め沖(海)ではなく、東を向いて舞う。これは東の陸地の稲魂を招いているのであろう。最後にカミ平瀬のノロたちは、沖を向いて座り、ネリヤの神に祈るのである。稲魂は身近な東の陸地や彼方のネリヤから招くものなのである。当然ネリヤからは、その年の豊漁が予知され、海幸も招いていることになる。要するにマンカイは、南島の正月アラセツに当たって、西東の稲魂を招き、さらにはネリヤの神の力によって、稲魂にも海幸にも恵まれるように祈る祭りである。

カミ平瀬のノロたちが歌い終わり、沖に向かってネリヤのカミに祈ると、メラベ平瀬の神人たちは、岩の上で輪になって八月踊りをする。やがてカミ平瀬のノロや神人は海辺に降りて、スス玉踊りをする。そしてこれらがすべて終わると、マンカイに関わ

たノロたちに加えて、地元民や一般人も参加して、盛大な八月踊りとなるのである(龍郷町 2019)。

平瀬マンカイは、歌(いわゆる琉歌)による言魂の呪術を試みる事であり、その年の豊作を祈る呪術による予言でもある。これに神を招くマンカイの舞いを含む民間信仰が加わった興味深い民俗芸能といえる(下野 2005)。今回秋名海岸の磯浜では、様々な南方由来の漂着物を確認することができた。自然物では、モダマ、ココヤシ、ゴバンノアシ、サキシマスオウノキ、ミフクラギ、モモタマナ、シロツブなどである。人工物では中国、台湾、ベトナムに由来する浮子やペットボトルなどである。これらは海の彼方ネリヤカナヤからもたらされたと、解釈することもできよう(下野 2013)。

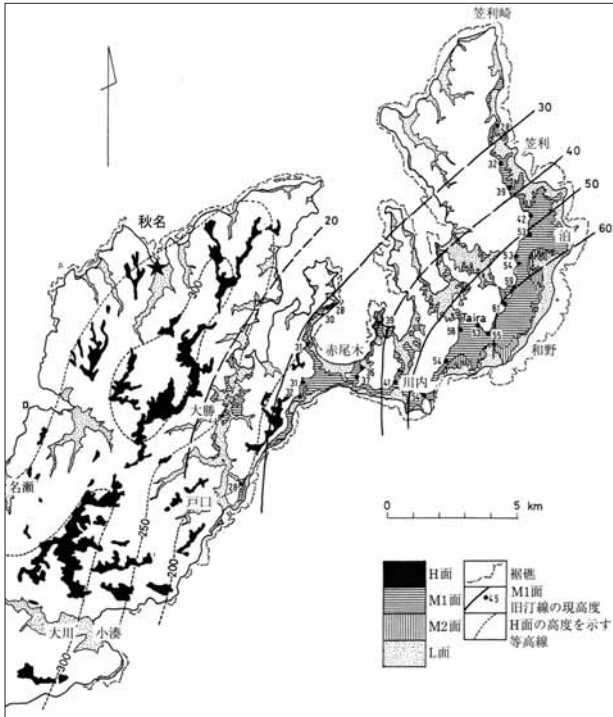
考 察

(1) 地質学的検討

奄美大島北部は、主に中生代白亜紀の堆積岩コンプレックスから構成される。秋名海岸は、四万十帯奄美コンプレックス役勝ユニットに所属し、硬質の堆積岩類から構成される(竹内 1994)。このうち特に黒色粘板岩は剥離の発達が著しい。このため海岸に露出した粘板岩は、平坦な侵食面を形成し、残存した岩塊がカミ平瀬、メラベ平瀬およびインガ平瀬である。これらの平瀬が、海岸の祭祀を行う際の平らなステージに適していたと思われる。

(2) 第四紀学的検討

内陸から海岸に至る秋名川下流部は、氷河時代の寒冷期(=新生代第四紀後期の低海水準期)には海面が低下し、内陸に入り組んだ深い谷(=溺れ谷)



第7図 奄美大島北部の地形区分図（池田 1977を改変）。
★：秋名海岸。

を形成していた。この溺れ谷は小規模なリアス式海岸に相当する。その後海面が上昇すると、軟弱な沖積堆積物が溺れ谷を埋積した（池田 1977）。

この沖積堆積物から構成されているのが、秋名川流域に認められるL面である（第7図）。現在沖積堆積物の表層は、稲作に適した水田になっている（中野・葉袋 2017）。

(3) 地形学的検討

秋名周辺には、基盤の白亜紀の付加体堆積物に南北方向の多数の断層が認められる（竹内 1994）。さらに南北方向の明瞭なリニアメント（線状構造）が認められる（井村 2012）。リニアメントとは、空中写真で地表に認められる、直線的な線状地形のことである。このような南北方向の顕著なリニアメントによって、北方向に開いた狭長な小湾が形成された。

また、湾の北側の東シナ海には、黒潮本流が北上している。そのため秋名海岸に打ち上げられ南方系漂着物は、海の神からの贈り物であり、これが常世ネリヤカナヤ伝説にもつながったのであろう（下野 2013）。

まとめ

(1) 奄美大島北部の秋名海岸は、中生代白亜紀の四万十帯奄美コンプレックス役勝ユニットに所属し、

剥離の発達する黒色粘板岩が卓越する。海岸に露出した粘板岩は、平坦な侵食面を形成し、残存した岩塊がカミ平瀬、メラベ平瀬およびインガ平瀬である。これらの平瀬が、海岸の祭祀を行う際のステージに適していた。

(2) 内陸から海岸に至る秋名川下流部は、氷河時代の寒冷期には海面が低下し、内陸に入り組んだ溺れ谷を形成していた。その後海面が上昇し、軟弱な沖積堆積物が溺れ谷を埋積した。

現在この沖積堆積物の表層が、稲作に適した水田になっている。

(3) 秋名付近には、南北方向の線状地形が認められ、北方向に開いた小湾が形成された。湾の北側には黒潮本流が流れており、秋名海岸に漂着した南方系漂着物は、海の神ネリヤカナヤ伝説にもつながった。

謝辞：本研究を進めるにあたり、日本学術振興会科学研究費補助金（基盤研究（C）19K03107）を使用したため、記して御礼申し上げる。

引用文献

- 池田安隆 1977. 奄美大島の海岸段丘と第四紀後期の地殻変動. 地学雑誌 86: 43-49.
- 池田清隆 2018. 磐座（いわくら）百選. 432pp. 出窓社, 東京.
- 井村隆介 2012. 地形・地質からみた2010年10月20-21日奄美大島豪雨による災害. 「2010年奄美豪雨災害の総合的調査研究」報告書: 1-4.
- 鹿児島県 1968. 奄美群島自然公園予定地基本調査. 海中公園センター調査報告 5: 1-382.
- 中野夏貴・葉袋奈美子 2017. 奄美大島の集落形態と水害との関係性. 日本女子大学大学院紀要家政学研究科・人間生活学研究科 23: 157-164.
- 野本寛一 2006. 神と自然の景観論—信仰環境を読む. 296pp. 講談社, 東京.
- 松井幸一・高橋誠一 2011. 聖地・妖怪分布からみる境界空間と住民意識—奄美大島龍郷町を事例として—. 関西大学東西学術研究所紀要 44: 243-272.
- 下野敏見 2005. 奄美・トカラの伝統文化—祭りとノロ, 生活. 452pp. 南方新社, 鹿児島.
- 下野敏見 2013. 奄美諸島の民俗文化誌—南日本の民俗文化誌10. 442pp. 南方新社, 鹿児島.
- 竹内 誠 1993. 5万分の1地質図幅「湯湾地域の地質」. 地質調査所, 東京.
- 竹内 誠 1994. 20万分の1地質図幅「奄美大島」. 地質調査所, 東京.
- 龍郷町 2019. 秋名のアラセツ行事（ショチョガマ・平瀬マンカイ）. 4pp. 龍郷町役場, 龍郷.

(Received Aug. 30, 2021; accepted Oct. 15, 2021)